

二柱の天照大神と饒速日尊の謎に迫る！

出口王仁三郎聖師は太陽神であつた！（後編）

出口 恒

伊勢神宮の心御柱と大物忌

「伊勢神宮には謎の神がいて、伊勢神宮の秘中の秘とされる心御柱がある。心御柱は、忌柱・天の御柱ともよばれ、神宮正殿床下の地面からよきつと顔を出し、本殿とつながっているわけではない。……この心御柱には、通常の神官は携わることができず、「大物忌」という特別な童女だけが祀っているのだという。

（関裕『天皇家の謎』学研）

「心御柱」に奉仕できるのが、「大物忌」という特別な童女だけ。そして「大物忌」というのは、祭られる対象が大物主神・すなわち饒速日尊だから名付けられ

たものでしょう。この「心の御柱」祭祀は皇室の女性の太陽神、

天照大神が祀られる以前の土着の太陽神、男性のアマテル神を祀る信仰をとどめたものではないでしょうか。なお、心御柱について撞御柱神・真木柱としての天照大神（饒速日尊）ではないかと考えます。（「真木柱」霊界物語』六巻二十一章）

二つの国譲り神話出雲と大和天孫降臨に先立ち出雲の国を

治めていた大国主命と国譲りの交渉をした神が経津主命と武甕槌命です。武甕槌神は神武天皇東征の折に神剣「布都御魂剣」を天皇に献じて東征を助け

ました。出雲の大国主命が大物主ノ物部の祖 饒速日尊であるなら、大国主命の皇孫への国譲りの物語と物部の祖饒速日尊の子 宇摩志麻治命の神武天皇への国譲りは二重写しとなり迫ってきます。出口王仁三郎聖師は玉鏡の中で興味深いことを述べています。

「一体、素盞鳴尊は大国主命に日本をまかされて、御自身は朝鮮の国に天降り給ひ、あるいはコーカス山に降り給ひて、亜細亜を平定され治められていた。尤も大国主命が治められた国は今、滋賀県より西であつて、それより東は天照大神様の治め給ふ地であつた。但し北海道は違ふ。大国主命に対して国譲りのことがあつたのは、其滋賀以西を譲れとの勅命であつたのである。故に素盞鳴尊の神業は大亜細亜に在ることを思はねばな

らぬ」（「素盞鳴の神業」玉鏡）

世阿弥の謡曲

思えば伊勢と三輪の神

室町時代の能役者、謡曲作家である世阿弥の謡曲の中に「三輪」があります。謡曲は昔から武士や上流階級の嗜みのひとつ。その最後の一節を引用してみます。

シテ「天乃岩戸を、引き立てて」地、神は跡なく入り給へば、常闇の世と、はやなりぬ」

シテ、八百萬の神達。岩戸の前にてこれを歎き、神楽を奏して舞ひ給へば」

地「天照大神その時に岩戸を、少し開き給へば、また常闇の雲晴れて、日月光り輝けば人乃面しろじろと見ゆる」

シテ、おもしろやと、神の御聲乃」地、妙なる始めの、物がたり思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神。一體分身乃御

事今更何と磐座いわくらや。その関せまの戸乃夜も明けかくありがたき夢の告げ。覚むるや名残なごりなるらん、覚むるや名残なごりなるらん」日本最古の神社、大神神社おほみかみじんじやの三輪の神が、伊勢うづに遷うつされた。伊勢と三輪の神は同体。……一般に猿樂者の教養は低く、差別された人たちだったと思われませんが、「謡曲三輪」には、「あの伊勢の神天照大神は三輪の神大物主だった、何を今さらなんといわくらや……」しかし伊勢とは何でしょうか。

天皇と大物主神、

元伊勢は一体

さて開化天皇までは、天皇の居室に天照大神を祀った鏡を置いてそこに奉仕し、夜もそこでお休みになる同殿同床どういでんどうとくが行なわれていました。御肇國みはつくに天皇との称を持つ皇祖・崇神天皇の六

年、宮中に天照大神と倭大國やまとのおおくに魂神たまのかみの二柱の神を祭っていました。天皇は二神の神威の強さを畏れ、宮の外で祀ることにしました。同天皇の御代には国内に疫病が流行り、人民の死亡するもの多く、その数は半分に達するほど。そこで神威を恐れた崇神天皇は、同殿同床にされていた二柱の神を皇居の外に出すことにされ、皇女豊鍬入姫とよすきいひめが、ま

ず神器である鏡と剣を持ち大和の国の笠縫村かさぬいに天照大神をお祀りになりました。聖師はこれを「人皇第十代崇神天皇が、皇運発展の時機を待たせ玉ふ御神慮より、光を和やわげ塵ちりに同まじはりて、海外の文物を我国に輸入せしめ玉ひし如く」『靈界物語』八卷四十三章）とし和光同塵わこうどうじんの制度として

います。

奈良・桜井市の三輪山の北の方にある、元伊勢もとせ・檢原神社けんげんじんじやは最

初の伊勢神宮。そして崇神天皇時代の皇居は同市内磯城瑞籬宮しみのみずかみのみやであり、饒速日命を祀る、元伊勢もとせ・志貴御しきのみ・座神社まじじんじやが伝承地です。大神神社も桜井市にあり、この時代は天皇と大神神社、元伊勢は一体でした。

さて、二〇一〇年一月七日、本年七月の奈良・京都研修で桜井市を訪問地と考える私たちに、タイムリーなニュースがもたらされました。「初期大和政権の大王墓とみられる奈良県桜井市の前方後円墳、桜井茶臼山古墳、三世紀末〜四世紀初め、全長二〇〇メートル）で、鏡片から少なくとも十二種、八十一枚の銅鏡が副葬されていたことが分かり、その一枚は卑弥呼の使者が中国の魏から帰国した「正始元年」

(二四〇年)の年号が入った三角縁神獸鏡えんしんじゆくかみで、初期大和政権の中心部だった奈良県では初の出

土。……中国の史書『魏志倭人伝』は、卑弥呼が二三九年、魏に使いを送り、皇帝から金印や銅鏡一〇〇枚を授かったと記述。」卑弥呼がいた邪馬台国やまとこくは奈良に位置し、それが大和朝廷に繋がったのではないか。その中で大王級古墳である事と、古墳時代初期の築造である事、ヤマト王権の誕生の場所である磐余いわわれの地である事に注目しました。大和朝廷最初の大王と考える神武天皇かむやまと・神日本磐余彦尊かむやまとひこのみことの磐余いわわれです。さて、奇しくも本年は大和(奈良)の地に平城京が開かれて千三百年目に当たる年です。これを機に七月に開催される京都奈良を舞台にした、研修会に参加頂ければ幸いです。謎解きをしましょう。

二柱ふたはしらの天照大神

崇神以前も初代神武天皇から

九代開化天皇までの皇后が、饒速日尊の神裔からあがられています。その後皇后も皇孫、母系は饒速日尊)か、饒速日尊の神裔氏族からあがられ、皇后から誕生される皇子のみが皇太子となる古代の慣例でした。大野七平「先代旧事本記訓註」批評社。

西暦五八七年、用明天皇が崩御、皇祖神饒速日尊大神を奉齋する物部氏は、崇仏派の蘇我氏と皇位継承をめぐる対立し、蘇我馬子は穴穗部皇子を擁立する物部守屋を倒し、崇峻天皇を立てて独裁的権力を確立。その後、物部氏を滅亡させた蘇我馬子・聖徳太子によって天皇記「國記」が作られました。物部氏が饒速日尊を奉齋し、中臣氏は伊勢神宮の祭神大日靈女貴尊をわが国最高神として、天照大神の尊称を奉り、この神を中心とする中臣神道を確立していきました。

持統天皇六年(六九二年)、中納言三輪高市麻呂は、天皇が伊勢に行幸して農事を妨げることを中心するよう求めました。天皇は聞き入れず伊勢に行き、随行した人と労役した人のその年の調役を免じました。この時、女神・天照大神が伊勢神宮に祀られたのか。三輪高市麻呂は物主(饒速日尊)を祭る系譜でしたから、冠位を脱いで抗議。天照大神は持統天皇自身の投影であったかもしれません。

さて「開祖は御所の中に入つて守護する」といつも言っておられた「饒速日尊と二岐命」「新月の光」上巻・八幡書店)のであり、開祖の神は、大日靈女貴尊としての天照大神と考えられます。同尊は、大と貴、尊が尊称であり、太陽神に仕える巫女・日靈女・卑弥呼と読めます。大日靈女貴尊の名前が『先代旧事本記

訓註』では出口なお開祖を示す敵御魂を含む撞賢木敵御魂天疎向津毘売尊とされています。それに対し王仁三郎聖師は「王仁は饒速日だ」と宣言されています。開祖にかかる大日靈女貴尊としての天照大神と、「天照國照彦天火明櫛瓊玉饒速日尊」としての聖師二柱の天照大神が存在したのでしょうか。

饒速日を主神とする 籠神社の起源

籠神社はかつて籠宮と呼ばれていました。その名称起源として「當社の古伝承で別名を彦火火出見命とも云われた籠船彦火明命が、竹で編んだ籠船に乗って、海の彼方の海神の宮(これを籠宮とか、常世とも呼ぶ)に行かれたとの故事で、社名を籠宮と云うと伝えられている。當宮の東方海上二〇程に、彦火

明命が最初に天降つたと伝えられる冠島がある。當宮、古稱吉佐宮)に祭つた天照大神を、後に倭姫命を御杖代として伊勢にお遷した時、御神靈が、この地は常世の重浪寄する美し国であると教えられた事が、書紀に出ている。海人族が日本人の原郷としての思慕を秘めて持ち伝え、た常世の信仰が、天照大神と切つても切れない関係にある事が偲ばれる。」

御祭神彦火明命こそが海部宮司によれば饒速日尊。そして現在の杵島のご神体のひとつが、自ら饒速日尊を名乗る出口王仁三郎聖師の、鉄鏡なのです。籠神社の神職は代々海部氏がつとめており、海部氏は尾張氏と同族で、男性の太陽神アマテルを祀る一族でした。この神は海部氏の祖であり、御神名が、天照國照彦」で始まる饒速日尊。籠神社に

は海部氏系図があり、同氏の始祖、饒速日尊たる天火明命からの血脈が記されています。なお彦火火出見命は神武天皇の祖父海幸・山幸伝説の山幸彦の別名であり、神武天皇自身も神日本磐余彦火火出見天皇（「神武紀」『日本書紀』）とされています。安部童子丸伝説、浦島太郎伝説も含めて全て竜宮の舞台冠島杵島に関わり、この謎にも迫りたいと思います。丹後一ノ宮、元伊勢一籠神社。籠神社には、「黄金のマナの壺」伝説が残っています。

出口王仁三郎聖師の

十六菊花紋の鉄鏡

次の話は私の母出口禮子から聞いたものです。先代海部毅定あまべ けいぢょう宮司が預かり、籠神社に保管されている出口王仁三郎聖師製作の鉄鏡について、一九八九年十

一月十三日（月）出口和明・禮子など四氏、海部光彦八十二代宮司から見せていただく。錦地でつくった袋にはいつており、赤いはぎれで包んである。袋も底の縫い目がほころびかけており、鏡をつつむ赤いはぎれは、かなり痛んでいて、昭和十年以前からのものと推測される。鏡は約九センチほどで、鉄製。表は十六菊花紋が刻印されている。錆びがすこし目立つ。裏には、つぎの歌が刻まれている。

世乃中乃 事有る時ぞ 知られける 神乃まもりの おろかならぬわ

海部光彦宮司は、「弾圧事件当時に表に出たら大変なことだったでしょう。十六菊花紋の鏡でしよう」と、先代宮司のところにこの鏡が入ってきた経過を次のように語られた。

宮司「綾部の金龍海の弁天さ

まのお宮（※杵島）にあつたときいています。聖師が内緒でつくられ、打っておられるのをある人だけが見ていたということですが。事件前に、その人はこの鏡のことが判れば大変なことだ、ということ、隠そうとされたが、土にうめれば錆びはてるし、家にもつてかえつても震えがでて、どうしようもなく、苦慮されて、京都の古道具屋にもつていった。古道具屋の主人に「こういうものがありません……」と事情を話し、「これをほしいという人があつたら……（※売るなりあづけるなり）」といえは古道具屋は「いや、そんなことがわかれば……（※あぶない）」と押問答をしているところへ、先代が偶然に通じかかったということ。先代（※明治三十三年生で三十六才ころ。昭和七年から籠神社宮司に）は古書籍が好きだつ

たので、よく古書店や古道具屋にゆかれていた。その問答を聞いた先代が口をだすとその人（女性だった、とも聞いてます）が代わりに拜むように頼んだ。互に名も名乗らずに、鏡が受け渡された。弁天さんの神体であつたというは、当社が市杵島姫ひめを重要な神さまとして祭っていることもあり、ここにこられるべくしてこられたのだと思っ

ています」

なお先代は、王仁三郎聖師と親交があつたといわれています。母禮子は海部光彦宮司から、「この鏡は出口聖師の鉄鏡です。お譲りしてもいいですよ」とお話をいただいた。海部氏は聖師の因縁から非常に好意的に接してくださり、禮子は欲しかったが言い出せなかった。その後、数年おいて母が海部宮司にその話を持ち出しかけた時に

は、「その鏡を譲るなんてとんでもない。これは杳島の二神体です」といわれて取りつくしまがなかつたとのこと。その頃には籠神社の社殿も整っていたようです。ある人がその話を同宮司に持ち出したところ、宮司は、本来、大本は当社の奥宮たる冠島杳島から神靈的に現われた宗教だから、その御神鏡が当社に帰ってきたのも御縁というか当然の事でしょう。」と言われたとのこと。

シユメールと十六菊花紋、
そして元伊勢の嚆矢こうしや

聖師鉄鏡の十六菊花紋。同紋章は、中央の円がやや小さいものの、ユダヤのヘロデ王の紋章（ヒマワリ紋）とほぼ同じデザイン。彼はヘロデ王家創始者で、イエス・キリストが生まれた時のユダヤの王様。また菊花紋はメ



アッシリア黄金杯に刻まれた十六菊花紋

ソポタミア地域、エジプト、イスラエル、インドあたりで、神や王家の紋として使われました。イラン・イラク戦争の時、サダム・フセイン大統領が十六菊花紋の指輪をしていて、ヨーロッパの記者が、日本の皇室の物と似ているので尋ねたところ、大統領は、この紋章は、我が国の祖先が世界最古の文明を築いたシユメール王朝時代に用いていた、王家の紋章である」と答えられたようです。（岩田明『日本超古代王朝とシユメールの謎』日本



シユメールの粘土板 十六菊花紋と十字架



文芸社）。向日葵ひまわりは、太陽を向いて咲く花。十六菊花紋が普及した地域が太陽光の強い地域。菊花の紋章は放射状の形から太陽になぞられたでしょう。

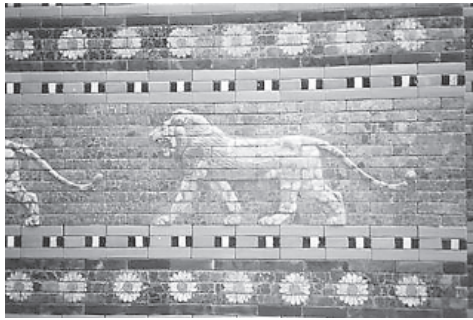
シユメール最高神アンの十六



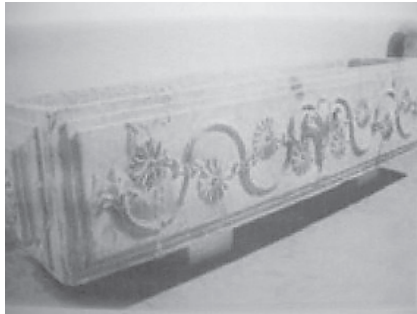
ツタンカーメン王の棺から出土した十六菊花紋

菊花紋は、神や最高権力者の象徴。メソポタミアは『靈界物語』で豊葦原とよあしはら 瑞穂の国みずほ 中津国「悔悟の歌」『靈界物語』三十二卷十七章」とされており、日本古「靈界物語」では同名で呼ばれています。

世界最古の都市文明はメソポタミアのシユメール文明。神素盞鳴大神の英子姫ひでこひめを含む五人の娘達が、曲津のために、侍女とともに朽ち果てた舟に載せられ、



バビロニア イシュタル門の十六菊花紋



ユダヤ ヘロデ王石棺の十六菊花紋



天皇家に古くから伝わる紋章
(平凡社 世界大百科辞典)

海に流され宮津湾にある天橋立の竜燈松の根元に漂着した「天橋立」霊界物語』十六巻一章)のも、メソポタミアの顕恩郷からです。竜灯松は実際にあった松で、「天橋立に毎月十六日夜半ごろ、丑寅の沖から竜灯が現れ文殊堂の方によってくる。堂の前に一本の松があり、これを竜灯の松という。伊勢の御灯というものもある」(「諸国里人談」『日本随筆大成』第二期二十四巻)

元伊勢籠神社のある天橋立の竜灯松から、本宮山を介して英子姫は丹波の元伊勢にいつて伊勢神宮を運営しますが、丑寅の沖、伊勢の御灯は示唆的ですね(「神定の地」『霊界物語』十六巻十六章)。
メソポタミアは、過去のペルシアの一部、現在のイラク。『富士古文書』の記載を根拠にして「国常立尊はペルシャから来た」(三浦一郎氏)との説があり、メソポタミアはシュメールなどを

通して日本と深く結びついています。伊勢の神はメソポタミア、あるいはイスラエルなどその周辺地域から来たという仮説が成り立ちます。
真の太陽神
聖師出口王仁三郎
十六菊花紋、太陽の紋章の刻まれた聖師鉄鏡が杳島に「ご神体」として納められました。天火明あめのほかり・太陽神饒速日尊が冠島杳島に天降り、その同尊 大物主大神こそ

が真の天照大神であることを見てきました。「王仁は饒速日だ!」……。
「天照彦之命の御魂に日の出の神の御用を致さすぞよ。大正八年の旧二月十日から、日の出の神は肉体を代えて守護が致さして在るぞよ。」(『神霊界』大正八年三月十五日号) 日の出神こそライジングサン、天照彦之命。そして宮中に永遠に祀られる、真の天照大神としての饒速日尊ではないでしょうか。
出口聖師は◎の拇印を持ちます。◎の形は日・太陽を意味します。「王仁は饒速日だ!」は、自身が太陽神であることの宣言だったのです。◎の母音を持つ聖師は、霊国にあっては月ですが、天国にあっては太陽と顕現されるのでしょうか。そして天照皇大神は神素盞鳴大神なのか……。